

# 令和五年度 入学試験（一般 第四回）問題（国語）

一 次の文章を読んで、後の【1】～【5】に答えなさい。

今日は、五十五（昭和二年引用者注）年四月の中旬である。魚津に移り住んで、まだ十日とは経っていない。それで、自然、風土、衣食住から人情にわたって、富山の「彩」について語ろうというのは、何としても大それた話である。富山をふるさとし、生育地とし、やがてアーヴィングボの地としようとしている人達とは、経験の度合がまるで異なり、従つて、その愛憎の揺れは比較するさえおろかなほど、まったくその感触が違つてゐる。しかしこういうことに神経質になつては、口をつぐむしかないだろう。

魚津に行って向こうに住むと言うと、東京の友人達は、誰もがええっと驚きの声を挙げる。何を今さらという、多少の批難をこめた、ことの意外への驚嘆である。そして誰もが同じように言う。冬は雪でたいへんだろう。さぞかし寒いだろう。秋の半ばから遅い春が来るまでは、どんよりと鉛色の空にとざされていて、憂鬱この上もないだろう。——こういったように、富山の自然、風土については他国者、とりわけ太平洋側のおこがましくも表日本という名をセンショウしている地域に住む人達は、みんなこうした概念的な知識を抱いている。

それに加えて、海は常に荒れている、と思っている。「荒海」といえば、どういうわけか、それは日本海ということになつてしまつた。

そういう概念的な、自然、風土にかぶせられる【\*】は、文芸の作者達が負わねばならぬ一面の責任を十分に持つてゐる。

『海は荒海 向うは佐渡よ

』という童謡を歌つたわたし達は、佐渡が島が浮かんでいる日本海は、【ア】「荒海」として印象づけられた。そして芭蕉の、

『荒海や佐渡に横たう天の川

』である。陰曆の七月七日を間近に、越後の出雲崎の光景だと伝える。『奥の細道』のその前後、別に暴風や台風に見舞われているらしくもなく、どうしてもこの荒海は、今日まで荒れている海ではなく、荒海と名に負う日本海という、概念的な言い方だろう。こういう文芸類が先行して、日本海には次第に荒海という【\*\*】が定着していくものと思う。まことに、迷惑な話ではないか。

しかし、魚津の海を眺めていると、海はまさしく生きている。そんな単純な、荒海という【\*\*\*】を貼つてノホホンとはしていられない。海をそのいろいろから言って、青海原と言い、海は青いという。しかし海の色も実際にこまめに変化する。それが、海自身が生きているということを、語りかけでもしているかのように、その色を変えていく。

魚津の海を、うちの窓から百メートルばかりのところに、ひろびろと見渡しながら、日中向かい合つていると、その【イ】変化に、飽きることを知らない。というよりも、こうした形で海に親しんだ経験ということが、わたしの生涯にはなかつた、と思う。もちろん、日本海と言つても、わたしが今眺めている海は、真向うに能登半島を見る、富山湾の海だ。外海にじかに接しているのとは、やや受け容れ方が違うのだろうが、それはそう想像しているだけで、まだはつきりと確めてはいない。

真向うの水見の山々が、まざまざと見えるとき、北風か南風が烈しく吹くと、海はあるで川のように動いていく。しかしその動きは、動きであって、流れではない。海面全体が、おしまったまま、一つの力を表わすように動いていくのである。

そういうときは、ほとんど、見る限り色は一色であって、潮筋のような縞目も見られない。

この海の一種が、うす緑のじゅうたんのよう、やわらかな暖かさに満たされてひろがつてゐた日が、二日ほどあつた。こればかりは海自身の色で、空の色を写した色ではなかつた。これが、春の海の色なのか、それは少なくとも一年の歳月を経験した上でなくては、かるがるしくは言えないけれども、いかにもそれはわたしに「春」を感じさせ、海の、春らしいおつとりとした感情を表明しているようであった。しかも、このうす緑の海の色のときは、

内からもつくりと満ち溢れてくるような具合であった。——しかし、昼が少し回るころには、この色は解消してしまった。

富山の彩。それはわたしのようだ、新来の、それも十日とは経っていない者にとって、かなりむずかしい課題である。しかし、こういう課題への答案を書くことをとおして、わたし自身、滞在者としての富山への理解を深めていくことになるだろう。

これは、その理解への道のとば口に立っている者の報告に過ぎない。

(池田彌二郎『海の色』)

【1】 空欄①②に該当する語を、それぞれ①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問 1 2】

- |   |        |        |        |        |        |
|---|--------|--------|--------|--------|--------|
| 1 | ①さしあたり | ②ひとまず  | ③まずもって | ④いったん  | ⑤とりあえず |
| 2 | ①たびたびの | ②こきざみな | ③ときどきの | ④ひんぱんな | ⑤しばしばの |

【2】 傍線部③④の漢字として正しいものを、それぞれ①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

- |   |     |     |     |     |     |
|---|-----|-----|-----|-----|-----|
| 3 | ①奮墓 | ②墳墓 | ③粉墓 | ④墳墓 | ⑤紛墓 |
| 4 | ①僭称 | ②宣称 | ③先称 | ④専称 | ⑤践称 |

【3】 空欄＊・＊・＊・＊には同じ語が入ります。正しいものを、①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問 3】

- |   |       |       |       |      |      |
|---|-------|-------|-------|------|------|
| 5 | ①ワッペン | ②レーベル | ③レッテル | ④ラベル | ⑤ポップ |
|---|-------|-------|-------|------|------|

【4】 この文章の作者・池田彌二郎が師事した学者として最も適当な人物を、①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問 4】

- |   |       |        |      |       |       |
|---|-------|--------|------|-------|-------|
| 6 | ①柳田國男 | ②金田一京助 | ③新村出 | ④折口信夫 | ⑤吉野作造 |
|---|-------|--------|------|-------|-------|

【5】 波線部のように記した筆者の思いとして、ふさわしいと考えられるものを、①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問 5】

- ①なにしろまだ十日の滞在であり、未知の土地を理解するための入口に立ったばかり、という思い。  
②新参者、といつまでも言い訳にするわけにもいかず、少しづつ本腰を入れねば、という思い。  
③富山という土地と人々を理解するための感触のようなものを、何とか得られたという、安堵の思い。  
④全てを理解しようとはせず、歩みは遅くとも、確実な成果を上げていく姿勢が大切、という思い。  
⑤困難でも、富山の土地と人々を理解するためにこれが唯一の道と、心を引き締めねば、という思い。

7

## 二次の文章を読んで、後の【6】・【11】に答えなさい。

少年はあやうく粉のなかに倒れこみそうになつた。ころえようと思つた。生ツバをのみこんだ。そのへんいっぺいに、クリームの黄色やジャムの赤や紫が (a) 気が遠くなつた。少年はタタキの上に沈みこんでしまつた。昏倒したのだ。明日の朝からかまに入れるビスケットの下ごしらえをしていたところだつた。両手に粉をつけたまま少年は救急車で病院に運ばれた。肺炎を起こしていた。

少年は笠原邦夫君といつた。山形市のはずれの農家に生まれた。男ばかり五人きょうだいの四番目である。父親が病身で力仕事が出来なかつたため、五人のきょうだいはみな、小学校のころから、畠仕事、田んぼ作業を手伝つた。中学校を終えると、邦夫君は東京へ出た。下町のパン屋さんに住みこんで、学校給食用の食パンを焼くことになつた。パン屋さんは朝が早い。早番は五時にもう仕事場に入つていて。粉とショートニングとスキムミルクを (ア) してこね、かたちをつけてかまに入れる。大きなパン屋さんだつた。一日に食パンだけで二千斤以上焼いた。

少年は食パンのにおいが好きだつた。やきたてのホカホカのをバターも何もつけずに食べると、何よりもうまかつた。しかしたいていの日、味見をする (b) もなく、パンは焼けるそばから運び出されていった。寮に住みこみで食費を差し引かれて給料の手取りは一万円とちょっとだつた。それでも少年は毎日がたのしかつた。

パンのほかに店ではビスケットや、スポンジケーキや、カステラを焼いた。そういうお菓子をつくるとき、少年はだれよりも張り切つた。少年の生涯かけてののぞみは、小学生のうちから決まつていた。お菓子屋さんになることだつた。自分の手で焼いたビスケットやカステラやタルトレットを、ガラスのケースにこぢんまりと盛りあげ、一つでも二つでもきれいに包装してお客様の手に渡し「お宅のお菓子はとってもおいしいわ」といわれるこ

とが、のぞみであつた。だからお菓子の作業がはじまるとき、少年は目をかがやかした。

定休日には浅草、銀座、六本木などへ出かけた。評判の洋菓子屋さんへ行つてお菓子を眺めた。一つ、二つと買って帰り、ノートにスケッチをし、大きさをはかり、色彩を書きこんだ。そして食べた。もちろん味についての感想を書いた。お菓子のノートが少しずつたまつていつた。東京へ出て数年はあつという間に過ぎた。

ある日。少年は誘いを受けた。 (イ) のお菓子づくりのベテランが独立して一軒の店をもつことになつた。洋菓子の専門店である。手伝わないかというのだった。少年はふるい立つた。渋谷のその小さな店で少年は朝六時から夜は一時ごろまで働いた。先輩の技術をむさぼるように吸いとつた。小店ではあるが、百種類ものお菓子を次々とこしらえて売り、評判をとつた。店のまわりにはいつもクリームの甘いかおりがただよつて、そこにうまい店のあることを知らせていた。

ところが、あまりの無理がたたつて少年はビスケットの粉を手にしたまま、昏倒してしまつたのである。給料は住みこみ食費向こう持ちで一万五千円だつた。たくわえはなかつた。次兄に助けられて病院ぐらしをした。

一ヶ月あまりで病気がなつたとき、少年の働き場所は、かわりにやつてきた同じお菓子づくりの好きな少年でうまつっていた。やはり農村出身で、境遇が似ていた。笠原邦夫君は立ち去つた。失職であった。ふるさとに帰つて長兄の農業を手伝おうにも、田んぼの区画整理中で休耕田になり、長兄さえ東京へ出稼ぎに出ていたぐらいである。次兄がH製作の下請工場をやつていたので、そこを頼ることにした。伝票整理などやつてはみたが、面白くもおかしくもなかつた。昏倒してもいいから、クリームのにおい、粉のなか、オーブンの熱の前に自分を立たせたかつた。叔父が下町の小さな洋菓子屋を紹介してくれたときはおどりあがつた。サブレーが名物の店である。少年は再び粉のなかに身を (c) 。

それから二年たつてゐる。少年は成人して青年になつた。毎日サブレーを焼く。粉とフレッシュバターと砂糖とたまご、それにベーキングパウダーと塩、これをミキサーにかけてかきませ、機械でのばす。一日に四千枚も焼いてしまう。笠原君はこの機械のおかげで夜は働くなくてもすむ。お菓子の勉強が出来る。しかし、機械でなく自分の手でこねたらサブレーはもつと歯にやわらかく舌の上でとろけるように出来るのだが……と思う。自分の店を一軒持つことが出来たら、手でこねたサブレーやビスケットを焼きたいと思う。出来るか出来ないか、ともかくやってみたいと思う。

この三月、世話になつた次兄が結婚した。店のオープンをかりて邦夫君ははじめて本式のウェディングケーキを焼いた。白いバラの花を美しく飾つた。あまりしつかり焼いたので、次兄とそのお嫁さんがナイフを入れたとき、なかなか切れなかつた。見ていた邦夫君はあわてた。切れ目を入れておくのを忘れた。結婚式はせわしなくてだれもケーキの評判をしなかつたが、邦夫君はうれしかつた。自分もひと口食べて見るとケーキはしつとりと甘かつた。

(増田れい子『ビスケットを焼く少年』)

【6】 空欄⑦に該当する語を、それぞれ①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問8 9】

- 8 ⑦ ①混合 ②調合 ③配合 ④調整 ⑤塩梅  
9 ① 腰高 ②目上 ③手練れ ④年長 ⑤年かさ

【7】 二重傍線部「紫が」に続く(a)として正しいものを、①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

- 10 (a) ①うずまいて ②たれこめて ③うごめいて ④たなびいて ⑤からまつて

【8】 二重傍線部「もなく」の前に置く(b)として正しいものを、①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

- 11 (b) ① よゆう ②いとま ③すきま ④ゆとり ⑤よはく

【9】 二重傍線部「身を」に続く(c)として正しいものを、①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

- 12 (c) ①置いた ②委ねた ③立てた ④任せた ⑤包んだ

【10】 この文章の作者・増田れい子の母である住井すゑの作品として正しいものを、①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問13】

- 13 ①『眞実一路』 ②『二十四の瞳』 ③『塩狩峰』  
④『橋のない川』 ⑤『挽歌』

【11】 波線部のように記した筆者の思いとして、ふさわしいと考えられるものを、①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問14】

- 14 ①誰も気にしていないケーキの切れ目に集中する姿を見て、その熱心さに改めて感動した、という思い。  
②兄の結婚式のケーキを焼けた幸せに浸る彼を見て、頑張ってよかつたねと確信できた、という思い。  
③真の幸せは、誰にも気づかれない所で続ける努力にこそ得られる、と改めて教えられた、という思い。  
④幼い頃からのぞみを着実に実現させている彼に、今後も心からエールを贈り続けたい、という思い。  
⑤誰も気づかなくても、ケーキに込めた彼の思いは、お兄さんにはきちんと届いているよ、という思い。

三次の【12】～【16】の記述のなかの□に用いる言葉としてふさわしいものを、それぞれ①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

【12】「今回の事態は、私にとり、まさに痛恨の□だ。」【解答欄は問【15】】

【15】①嗜み ②試み ③企み ④含み ⑤極み

【13】「□のために、一度、じっくりお話を伺いたいものだ。」【解答欄は問【16】】

【16】①高学 ②工学 ③後学 ④光学 ⑤講学

【14】「君の主張は、しょせん、絵□事に過ぎない。」【解答欄は問【17】】

【17】①空 ②沼 ③海 ④河 ⑤山

【15】「彼の会社は、このところ、自転車□だ。」【解答欄は問【18】】

【18】①興行 ②産業 ③稼業 ④操業 ⑤営業

【16】「この一週間は我が社にとり、□の霹靂と、言わざるをえない。」【解答欄は問【19】】

【19】①荒天 ②青天 ③昇天 ④好天 ⑤満天

四 次の【17】～【21】の対義語・反対語としてふさわしいものを、それぞれ①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

【17】「不毛」【解答欄は問【20】】

【20】①有益 ②繁盛 ③肥沃 ④豊穣 ⑤有効

【18】「歓喜」【解答欄は問【21】】

【21】①哀愁 ②绝望 ③悲惨 ④呆然 ⑤悲哀

【19】「軽微」【解答欄は問【22】】

【22】①絶大 ②膨大 ③極大 ④甚大 ⑤巨大

【20】「偽善」【解答欄は問【23】】

【23】①露悪 ②虚勢 ③醜悪 ④虚榮 ⑤自尊

【21】「傲慢」【解答欄は問【24】】

【24】①寛大 ②謙虚 ③誠実 ④素直 ⑤柔和

五 次の【22】～【26】の名前の人物や動物が登場する作品・作者名として、正しいものを、それぞれ  
①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

【22】 「愛川吾一」【解答欄は問【25】】

- ①『路傍の石』(山本有三)  
②『一〇〇万回生きたねこ』(佐野洋子)  
③『おじいさんのランプ』(新美南吉)  
④『ちいさいモモちゃん』(松谷みよ子)  
⑤『蜘蛛の糸』(芥川龍之介)

【23】 「パトラッシュ」【解答欄は問【26】】

- ①『大きな森の小さな家』(L・I・ワイルダー)  
②『赤毛のアン』(L・M・モンゴメリ)  
③『青い鳥』(メーテルリンク)  
④『ふたりのロッテ』(E・ケストナー)  
⑤『フランダースの犬』(ウェーダ)

【24】 「梅澤梨花」【解答欄は問【27】】

- ①『告白』(湊かなえ)  
②『風』(小池真理子)  
③『紙の月』(角田光代)  
④『デューケ』(江國香織)  
⑤『ホテルローヤル』(桜木紫乃)

【25】 「蒔野聰史」【解答欄は問【28】】

- ①『土の中の子供』(中村文則)  
②『ひとがた流し』(北村薫)  
③『シンセミア』(阿部和重)  
④『マチネの終わりに』(平野啓一郎)  
⑤『マスカレード・ホテル』(東野圭吾)

【26】 「寺内寿三郎」【解答欄は問【29】】

- ①『雷桜』(宇江佐真理)  
②『光と影』(渡辺淳一)  
③『プラナリア』(山本文緒)  
④『リミックス』(藤田宜永)  
⑤『海がきこえる』(氷室冴子)

【29】

6